

修士論文
2012年1月

日本語学習者は日本語の教科書をどのようにとらえているか
—中国語母語話者を対象に「不安」という観点から—

指導 齋藤伸子 先生
言語教育研究科
日本語教育専攻
210J3016
宗像みなみ

目次

第1章	研究背景と目的	1
第2章	先行研究	3
2.1	日本語教育文法という観点からの教科書分析	3
2.2	日本語教育における教科書論	4
2.3	第二言語不安	5
2.4	本研究における第二言語不安の位置づけ	7
第3章	調査概要	9
3.1	調査方法	9
3.2	調査対象	10
3.3	調査手順	10
第4章	結果分析	12
4.1	CS1 の場合	15
4.2	CS2 の場合	27
4.3	CS3 の場合	39
第5章	考察	49
5.1	CS1 の場合	49
5.2	CS2 の場合	50
5.3	CS3 の場合	53
5.4	総合的考察	55
第6章	まとめと今後の課題	57

謝辞

参考文献

巻末資料

要旨

基礎的文法・単語を体系的かつ大量に学ぶ必要のある初級レベルの成人言語学習者にとって、教科書の役割は大きいものと思われる。しかし、これまで多くの研究者が、日本語の教科書と実際の日本語が乖離していることを指摘してきた。一方で、教科書に対する学習者の認識という視点からの研究はほとんどみられない。

では、日本語学習者は「日本語の教科書」を個々の学習の中でどのように位置づけ、どのようにその存在をとらえているのだろうか。教科書と実際の日本語にずれがあれば、第二言語学習者は教科書の日本語に対し、不安を感じているのではないか。そうであれば、その不安は習得に何らかの影響を与えるのではないか。以上を踏まえて本研究では、「第二言語不安」という視点から「日本語学習者が見る教科書」を検討することを試みる。教科書そのものに対する学習者の認識を洗い出すとともに、その中に「不安」という要素がみられるかどうか明らかにすることを目的とする。

本研究では PAC 分析(Personal Attitude Construct/個人別態度構造)を用いた。PAC 分析は、内藤(1993, 1997)によって開発された、質的分析と量的分析を結合した方法である。PAC 分析は個人内のイメージや態度の構造分析に優れているとされ、わずか 1 事例であっても要因やメカニズムを発見する可能性をもっている(内藤 1997)。自由連想法を用いて、イメージや態度を協力者自身の言葉で表現してもらうことで、その結果が研究者の主観やスキーマに基づいた決断に影響されることを回避できると考えられている。また、現在では態度やイメージの構造だけではなく、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスまで測定できることが確認されている(伊藤他 2008)。調査では日本語初級学習者である中国語母語話者 3 名(CS1,CS2,CS3)を対象とした。

結果として、調査対象となった 3 名すべてに共通して「教科書に対する強い信頼感」が見られた。その中には「教科書に間違いがあるはずはない」という、中国における教育背景から生まれたとも考えられる価値観もみられた。もともと、教科書をはじめとした教師・授業など教室活動に対する盲目的な信頼感は観察されなかった。また、協力者 CS2 においては、「試験のための日本語」と「コミュニケーションのための日本語」という、日本語学習における異なる最終目的の間で揺れていた。この学習者の内面には、日本語学習全体を通して「不安感、不信、不満」と「安心感、信頼感」が共存していた。また、その中には確かに「教科書に関する不安」すなわち「教科書不安」といえるものがみられた。さらに、異なる協力者間に「初級だから(教科書の意義、位置づけについて)まだ判断できない」という発言がいくつか観察されたことから、「メタ知識が少ないことから教科書の分析ができない」ことが、初級レベル特有の問題として生じるという可能性が示唆された。これに関連して、「自らのレベルが初級である」という学習者の認識が、学習者に教科書や学習そのものについて考えることを放棄させる可能性について論じた。以上を踏まえ、「教科書への強い信頼感」は初級特有のものであるという仮説を生成した。

これらに対処するために、学習者には、リソースという観点で学習環境をとらえること、自身で積極的に言語使用の機会を作る姿勢を持つことが、教育者には「副教材や使用の手引が充実した教材」を『みんなの日本語』だけにとどめず種類を増やしていくこと、教室でなぜその教科書を用いるのか教師

が分析し説明できることがそれぞれ求められる。両者に共通する課題としては(1)学習者の「教室内」と「教室外」をつなげる視点を持つこと、(2)学習者の「教材分析能力」を高めることが挙げられる。

参考文献

- 伊藤武彦，内藤哲雄，井上孝代，やまだようこ，南風原朝和（2008）「PAC分析を語る(1)：質的分析と量的分析の結合について」（自主シンポジウムG8 配布資料）
- 白川博之（2005）「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp.43-62.
- 柴原智代、島田徳子（2008）「これからの日本語学習を教材で支援するために必要なこと」（特集 教科書で教える）日本語教育論集（24），33-47
- 内藤哲雄（1997）『PAC 分析実施法入門[改訂版]：「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp.1-20.
- 丸山敬介（2008）日本語教育において「教科書で教える」が意味するもの（特集 教科書で教える）日本語教育論集（24），3-18
- 元田静（2005）『第二言語不安の理論と実態』溪水社
- Aida, Y. (1994) Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78, pp.155-168.
- Brown H. D. (1986) *Principles of Language-Learning and teaching*. Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall.
- Gangschow, L., & Sparks, R. (1996) Anxiety about foreign language learning among high school women. *Modern Language Journal*, 80, pp.199-212.
- Horwitz, Horwitz, & Cope (1986) "Foreign Language Classroom Anxiety." *Modern Language Journal*, 70, pp.125-132.
- Horwitz, E. K. (2001) Language anxiety and achievement. *Annual Review of applied Linguistics*, 21, pp.112-126.
- Kitano, K. (2001). Anxiety in the college Japanese language classroom. *Modern Language Learning*, 27, pp.93-107.
- MacIntyre, P. D., (1995). How does anxiety affect second language affect second language learning?: A reply to Sparks and Gangschow. *Modern Language Journal*, 79, pp.90-99.
- Saito, Y., & Samimy, K. K. (1996). Foreign language anxiety and language performance: A study of learner anxiety in beginning, intermediate, and advanced-level college students of Japanese. *Foreign Language Annals*, 29(2), pp.239-251.
- Steinberg, F.S. & Horwitz, E. K. (1986) "The effect of induced anxiety on the denotative and interpretive content of second language speech." *TESOL Quarterly*, 20, pp.131-140.
- Spielmann, G. & Radnofsky, M. L., (2001) Learning Language under Tension: New Directions from a Qualitative Study, *The Modern Language Journal*, 85, pp.259-278.

